

鳥取県米子市

こ なみ いざみ はら い せき
小 波 泉 原 遺 跡

2007.3

財団法人 米子市教育文化事業団

序

新しい米子市が誕生して2年が経ちました。合併に伴って当市が掲げた歴史・文化を踏まえたプロジェクト「伯耆の国よなご文化創造計画」にそって、市民・行政が一体になって、豊かな心を育む教育と文化のまちづくりに、一步一歩取り組んでいます。その中において、文化財の保護と活用も基本計画に掲げられていますが、当事業団も合併に伴って今回初めて旧淀江町において発掘調査を実施することになりました。

今回、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国から委託を受けて実施した「小波泉原遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。調査では、古墳時代の住居跡が発見されました。この報告書が、今後さまざまな分野で広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査に当たって多くの方々にお世話になりました。指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成19年3月

財團法人 米子市教育文化事業団

理事長 小林道正

例 言

- 1 本書は株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国の依頼を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が平成18年度に実施した、NTTドコモ米子小波携帯電話基地局設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書の図中の方針は磁北で、レベルは海拔標高を示す。
- 3 本書に記載した第2図の地形図は昭和63年10月修正米子境港都市計画地図（米子市）を複写して掲載している。
- 4 本書に記載した第3図の地形図は平成17年1月1日、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を加筆して使用した。
- 5 発掘調査によって出土した遺物は、米子市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆及び編集は（財）米子市教育文化事業団が行った。

凡 例

- 1 遺物実測のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
- 2 遺跡の略称は、KNIHとした。
- 3 遺物実測図の縮尺はすべて1/4で掲載している。
- 4 本文、挿図及び写真図版中の番号は一致する。
- 5 柱穴の法量は（長辺×短辺×深さ）で表記し、穴の一部が重複あるいは欠損したものについては推定値とし※を付す。



第1図 米子市位置図

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第2章 位置と環境	2
第1節 位置	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 小波泉原遺跡の調査	5
第1節 調査の経過と方法	5
第2節 調査区内の堆積	6
第3節 遺構について	6
第4節 遺物について	10
第4章まとめ	11

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国が進めるNTTドコモ米子小波携帯電話基地局設置工事に伴い、文化財の保護を目的とした調査である。

これを受け平成18年度に米子市教育委員会が試掘を行った結果、遺物の包含層が確認され、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国との協議の結果、調査を平成18年度に行うこととなった。現地調査は、平成18年8月16日から平成18年8月31日まで行った。

調査の結果、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、柵列4列の遺構を確認し、土師器・須恵器が出土した。

第2節 調査の体制

・調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

 理 事 長 小林 道正

・調査担当 埋蔵文化財調査室

 室 長 長谷川明洋

 主任調査員 平木 裕子

 臨時職員 森田 静香

 非常勤職員 田中 吕子

・調査指導 米子市教育委員会

・作業員

 入沢美智子 植佐 知子 梅林 明子

 大木 宏生 大江由美子 加藤 晴己

 金築千恵子 金築 敏則 西村 薫子

 秦 千鶴香 福嶋 昌子 細田 恵美

 松山 節子 (敬称略)



第2図 小波泉原遺跡位置図 (S = 1 : 20,000)

第2章 位置と環境

第1節 位置

今回調査を行った小波泉原遺跡は、米子市の東部の淀江町小波地区に広がる古墳時代の集落跡である。

米子市は鳥取県の最西端に位置し、古くから「山陰の商都」と称されるように商業で栄えた鳥取県西部の中核都市である。平成17年春に東部に隣接する淀江町との合併により総面積132.21m²、人口約15万人となった。

地形的には、日野川の沖積作用によって形成された山陰では比較的広い平野である米子平野が広がり、周辺部を東側に大山（標高1,729m）とその造山活動によって形成された火山灰地帯、南側から西側には中国山地から続くなだらかな丘陵によって開まれる。北側には日野川の流出土砂の堆積によって形成された弓ヶ浜半島が島根半島へと延び、これらの半島に囲まれた汽水湖中海に面する。

小波泉原遺跡は、米子市街地の東約7km、大山の裾野の旧米子市と旧淀江町の境に位置する。北側には壱瓶山を、北東方向には淀江平野の広がりを望み、さらにその奥に日本海を望む小高い丘陵に広がる百塚遺跡群の一角を成す。百塚遺跡群は主に弥生時代から古墳時代の集落跡及び古墳群で知られる遺跡で、今回の調査地は旧淀江町教育委員会によって設定された百塚第5遺跡の一角に位置し、1994年に（財）鳥取県教育文化財団によって調査が行われた百塚第5遺跡の東側に位置する。

第2節 歴史的環境

当該地区で人類の痕跡が見られるようになるのは旧石器時代まで遡ることが出来る。小波で黒曜石製のナイフ形石器、中西尾で黒曜石製の有舌尖頭器、奈喜良遺跡・陰田宮の谷遺跡のほか、隣接する南部町諸木遺跡²⁰・福成石佛前遺跡においてもサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡としては、早期の遺跡として多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている上福万遺跡²¹があげられる。前期になると日久美遺跡で多数の石錘や獸骨、ドングリ貯蔵穴、青木遺跡²²では落し穴群が検出され、新山山田遺跡、古市遺跡群において縄文時代の遺構・遺物は出土しているが、集落としての全体像は不明である。この時期の遺跡の分布の中心は日野川の東岸に見られる。旧淀江地区では、多量の石錘・黒曜石剥片とともに木製漁獵具が出土した早期から前期の渡り上り遺跡²³、隣接する鮎ヶ口遺跡²⁴では爪形文土器、条痕文土器、曾畠式土器が出土している前期の遺跡である。河原田遺跡²⁵では、後期から晩期にかけての土器が多量出土しているほか、井手脇遺跡²⁶では漆塗櫛・耳環をはじめとする漆製品が出土している。その他壱瓶山第1遺跡²⁷・井手鉢遺跡においても縄文時代の土器及び遺構が検出されている。百塚遺跡群²⁸では落し穴が検出されている。

弥生時代になり海退が進むとともに低湿地が広がり、水田が開かれるようになる。そしてその周辺の微高地では集落が営まれるようになる。前期の遺跡としては、日久美遺跡・池ノ内遺跡・長砂第1・2遺跡・錦町第1遺跡などのほか、淀江平野の北部の今津岸の上遺跡²⁹では前期末のV字状環濠が確認されたほか、初期稻作集落が形成されたことが窺える。

中期になると丘陵にも集落が営まれるようになるが、大規模で長期間継続するものと、小規模で短期間で消滅するものとに分かれる。淀江地区においても平地から微高地にかけて晩田遺跡³⁰・北尾宮廻遺跡³¹・角田遺跡³²・福岡遺跡³³など集落が分散して営まれるようになる。中でも角田遺跡で出土し

た線刻絵画は、当時の生活様式及び精神世界を知るうえにおいて貴重な資料といえる。福岡遺跡で確認された粘土探掘坑は、土器製作に用いられたものと考えられる。日野側西岸の撿点的遺跡には、目久美遺跡・青木遺跡・越敷山遺跡群・橋本遺跡群が挙げられる。

後期になるとムラを統括する首長が出現するようなるが、青木遺跡、福市遺跡、越敷山遺跡など中期から引き続き大規模な集落を形成する一方、尾高浅山遺跡1号墓⁵⁸や日下1号墓⁵⁹で知られる四隅突出型埴丘墓が発達する。また淀江地区においては、百塚第1遺跡、楚利遺跡⁶⁰、井手挟遺跡、坂ノ上遺跡⁶¹のほか、国内最大の高地性集落として知られる妻木晩田遺跡⁶²が出現する。ここでは集落・環濠および埴丘墓が確認されるなど、国家形成期の地方の様相を示す遺跡として注目される。

古墳時代になると勢力をもった集団の存在を裏付けるかのように古墳が築かれるようになる。前期の古墳としては、三角縁神獣鏡が出土した普段寺1号墳・2号墳、石州府29号墳⁶³、日原6号墳が知られる。普段寺1号墳は前方後円墳、普段寺2号墳・日原6号墳は方墳、石州府29号墳は円墳である。淀江地区においては晩田山古墳群⁶⁴において墳墓が確認される。

中期の古墳としては三崎殿山古墳などがみられる。また米子平野周辺の丘陵部には多くの古墳群が存在する。日野川西側では、福成早里古墳群、宗像古墳群、東宗像古墳群、陰田・新山遺跡群、新山・占市遺跡群、日野川東側では、尾高古墳群⁶⁵、日下古墳群⁶⁶、石州府古墳群⁶⁷などの古墳群がみられる。淀江地区においては上ノ山古墳が築造され、ここでは竪穴式石室から、内行花文鏡・滑石製小勾玉・甲冑の出土している。中期後半になると向山3号墳⁶⁸や坂ノ上1号墳⁶⁹が築造されるが、盾持人などの形象埴輪が多量に出土した井手鉄3号墳や径40mを測る日吉塚古墳などが含まれる中西尾古墳群⁷⁰において、淀江平野を支配した首長墓の系譜が窺える。

後期になると米子平野において横穴式石室を主体部とする古墳と、横穴墓の両方が展開するいくつもの古墳群が形成されるようになる。中でも石州府古墳群、東宗像古墳群、宗像古墳群、陰田古墳群などがよく知られる。淀江地区周辺においても古墳の数は増え広く分布するようになるが、首長の系譜は向山古墳群に移ったようで、石馬谷古墳、長者ヶ平古墳、岩屋古墳などが築造される。一方城山遺跡⁷¹、稻吉遺跡⁷²、四十九谷遺跡⁷³、高井谷遺跡⁷⁴、中西尾遺跡⁷⁵、西尾原遺跡⁷⁶、百塚遺跡⁷⁷、壺瓶山遺跡⁷⁸、小波上遺跡⁷⁹、中間遺跡⁸⁰など古墳群・横穴墓群が多く造営される。

一方集落遺跡は、弥生時代から引き続いで營まれる福市遺跡⁸¹、青木遺跡、百塚第1遺跡、井手挟遺跡などのほか、奥谷掘越谷遺跡、奈喜良遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、新山砥石山遺跡、新山山田遺跡、古市カワラケ田遺跡、百塚第4、第5、第6、第7遺跡、福賴遺跡⁸²などが知られる。

奈良時代以降の遺跡としては、墨書き土器や木簡など官衙に関する遺物が出土している陰田・新山遺跡が知られているが、吉谷鉢神遺跡、吉谷中馬場山遺跡でも墨書き土器や赤色塗彩土師器などが出土している。その他福市・青木遺跡、淀江地区的百塚遺跡群で集落跡が確認されている。

白鳳期には全国的に多くの寺院が建立されるようになるが、国内最古級の仏教壁画が出土したことで注目された上淀庵寺跡⁸³が有名である。

中世遺跡の城館跡としては、中世の撿点であったと思われる尾高城⁸⁴をはじめ、山名氏支配下の人によって構築されたと思われる新山要害、石井要害、橋本七尾城などがある。そのほか、中世の遺跡としては、青木古墓、諫訪1号墳⁸⁵、別所長峰古墓、長砂経塚、中山経塚などがある。

近世になると米子は中村氏→加藤氏→池田氏→荒尾氏と支配されるようになり、その過程で米子城周辺に城下町が発展する。



第3図 周辺遺跡分布図

1 小波原古墳群	15 中間古墳群	28 四十九谷横穴墓群	41 萩木晚田遺跡	54 今在家下井ノ上遺跡	67 福岡古墳群	80 鹿津南山崎遺跡
2 百塚遺跡群	16 版ノ上遺跡	29 小枝山瓦窯跡	42 萩木山古墳群	55 高尾城跡	68 丸山朝日当遺跡	81 鶴賀山西ノ便遺跡
3 喜多原第1遺跡	17 小波山古墳群	30 城山古墳群	43 番田山古墳群	56 尾高浅山遺跡	69 番原遺跡群	82 謙訪1号墳
4 喜多原第2遺跡	18 大下畠遺跡	31 小枝山古墳群	44 源平山古墳群	57 石田古墳群	70 古吉北田山遺跡	83 鶴所中野山下武代穴
5 喜多原第3遺跡	19 福領遺跡	32 上淀庵寺跡	45 大新田遺跡	58 新良路遺跡	71 古久第3遺跡	84 穂ノ口第3遺跡
6 喜多原第4遺跡	20 西尾原古墳群	33 向山古墳群	46 德楽方墳	59 日下平道遺跡	72 貝田原遺跡	85 穂ノ口第4遺跡
7 岡成第9遺跡	21 中西尾古墳群	34 瓢山古墳群	47 長田古墳群	60 日下古墳群	73 片岸本大成遺跡	86 福市遺跡
8 岡成古墳群	22 河原田遺跡	35 井手跡遺跡	48 客屋山古墳群	61 日下寺山遺跡	74 鶴敷が丘遺跡	87 齋木遺跡
9 泉角屋敷遺跡	23 渡り上り遺跡	36 福岡遺跡	49 塚原遺跡	62 上福万古神遺跡	75 大寺庵寺跡	88 放し山遺跡
10 泉前田遺跡	24 鮎ヶ口遺跡	37 北尾宮跡遺跡	50 原畠遺跡	63 上福万遺跡	76 板中庵寺跡	89 下安曇遺跡群
11 泉中峰遺跡	25 角田遺跡	38 豊利遺跡	51 人道原遺跡	64 石州府古墳群	77 長者屋敷遺跡	90 上安曇古墳群
12 泉上経前遺跡	26 高井谷古墳群	39 晚田遺跡	52 今津岸ノ上遺跡	65 河町城跡	78 衛藤チゴ原遺跡	91 別所遺跡群
13 尾高古墳群	27 桜吉古墳群	40 晚田山古墳群	53 壱瓶山古墳群	66 岸本下原遺跡	79 長者原遺跡	92 齋木遺跡
14 尾高獨立山遺跡						

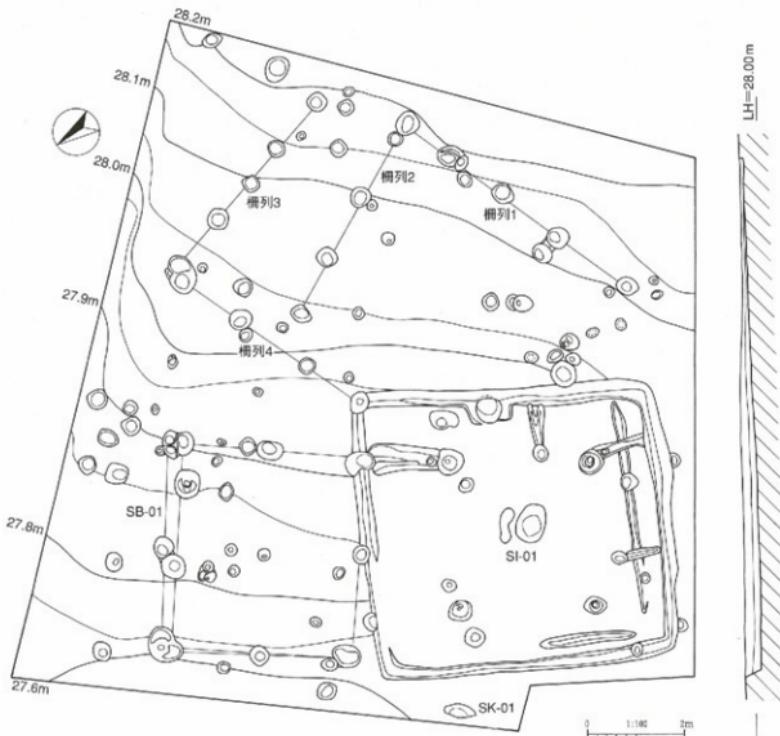
第3章 小波泉原遺跡の調査

第1節 調査の経過と方法

現地調査は、平成18（2006）年8月16日から開始し、平成18（2006）年8月31日まで行った。調査面積は、約164m²で、深いところで現地表面から約0.6m掘り下げた。調査地は大山の裾野の丘陵地に当たり、調査地の南東側で約10cm掘り下げたところで地山を検出し、北西方向に向かって緩やかに傾斜し、北西部側の厚いところでは約60cm掘り下げたところで地山を検出した。調査地は標高約28mで、調査開始時は荒地であったが以前は耕作地として利用されていた。

地表面から50~60cmまでの現在の耕作土を重機で除去した後、人力により掘り下げていった。

遺物の取上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用した。調査の結果、遺構としては竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、柵列4列、土坑を検出した。遺物は大量の土師器のほか、須恵器、土師器が出土した。



第4図 調査地全体図

第2節 調査区内の堆積（第4図）

調査地は大山の裾野の丘陵にあたるが、調査前の地形は標高28.3mのほぼ平坦であった。調査後は最頂部の標高28.2m、最低部標高27mと、高低差1.2m、傾斜角度10°と、調査地の南東側から北西側に向けて緩やかに傾斜し、堆積も傾斜にあわせて下方に向かうにつれて厚くなる。土層観察は調査地の西側壁面で行った。その堆積は、第1層表土、第2層暗茶黒色土の2層から成る。

第3節 遺構について

竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、柵列4列、土坑を検出した。

竪穴住居跡（第5図）

S1-01 調査区の西側隅において検出した。一部が調査区外にかかるため調査区を西に拡張して全体の調査を行うことになった。

一辺6.3m×5.8mの方形で、主軸はN33°E方向を向き、残存壁高は最大35cmを計る。床面には壁に沿って幅約20cm、深さ6cmの溝が掘られていた。また本住居は拡張が行われたようで南側で約50cm、西側で40cm、北側で20cm壁面から内側に拡張前のものと思われる溝の痕跡を検出した。

主柱穴は4本で、P1(55cm×40cm-70cm)、P2(56cm×52cm-64cm)、P3(50cm×45cm-73cm)、P4(47cm×36cm-72cm)で、P1 P2間3m、P2 P3間2.9m、P3 P4間3m、P4 P1間2.8mである。P2およびP3からは、周溝に向かって、それぞれ幅約50cm、深さ約6cm、幅約24cm、深さ約5cmの溝が延び、その中に小柱穴P5・P6を検出している。この小柱穴の規模はP5(20cm×16cm-45cm)、P6(20cm×14cm-43cm)で、P2・P3を支えるための柱があったと思われる。主柱穴のほか、本住居に伴う柱穴としてP7・P8が考えられる。この柱穴からはそれぞれ周溝に向かって幅約20cm、深さ3~5cmの溝が延び、間仕切りの役割を成していたと思われる。床面中央には80cm×58cm-7cmの焼土坑が見られ、この土坑の周囲にも焼けた痕跡がみられた。本住居には主柱穴の他にいくつかの特殊な穴が検出された。まず東壁面中央床面で検出された土坑状の穴P9で、規模は50cm×50cm-36cmのフラスコ型を呈する。位置的にみて周溝に溜まった水を溜めるための枠の役割を成していたと思われる。また不明瞭ではあるが、この穴の周りを方形に僅かに掘り下げた痕跡が残り、おそらく板状のものを蓋にして水を溜めていたのであろう。次に性格は不明であるが、南側壁面に二箇所径約25cmのP10・P11を検出した。北側壁面の対応する箇所にはSB-01等の柱穴が掘り込まれているため明確ではないが、同じような小穴があった可能性もあり、本住居に伴うものと考えられる。

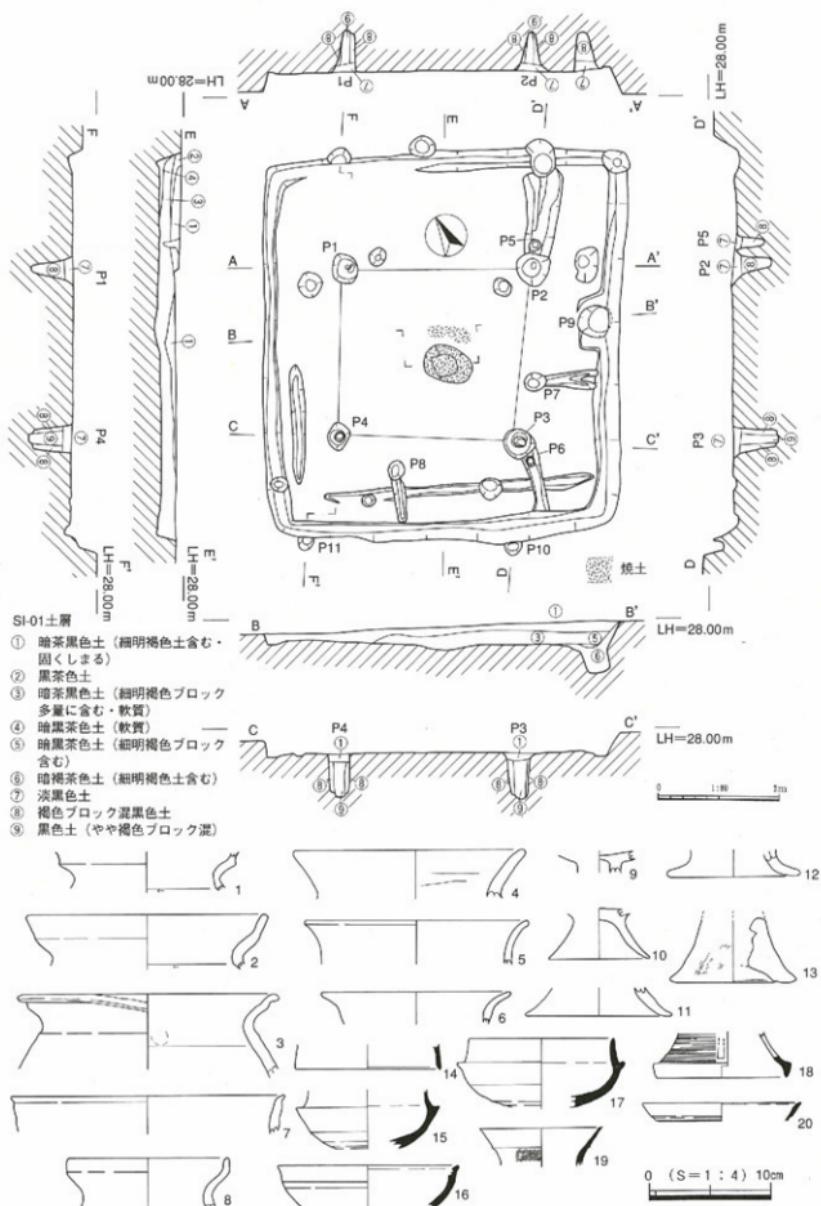
出土遺物 本住居から若干の遺物が出土しているが、そのほとんどが掘り下げ中のもので、小破片や摩滅した状態の悪いものであった。床面からは数点小破片が出土したのみであった。

土師器 No.1~No.7は甕、No.8は壺、No.9~No.11は高壺、No.12は低脚壺、No.13は土製支脚である。

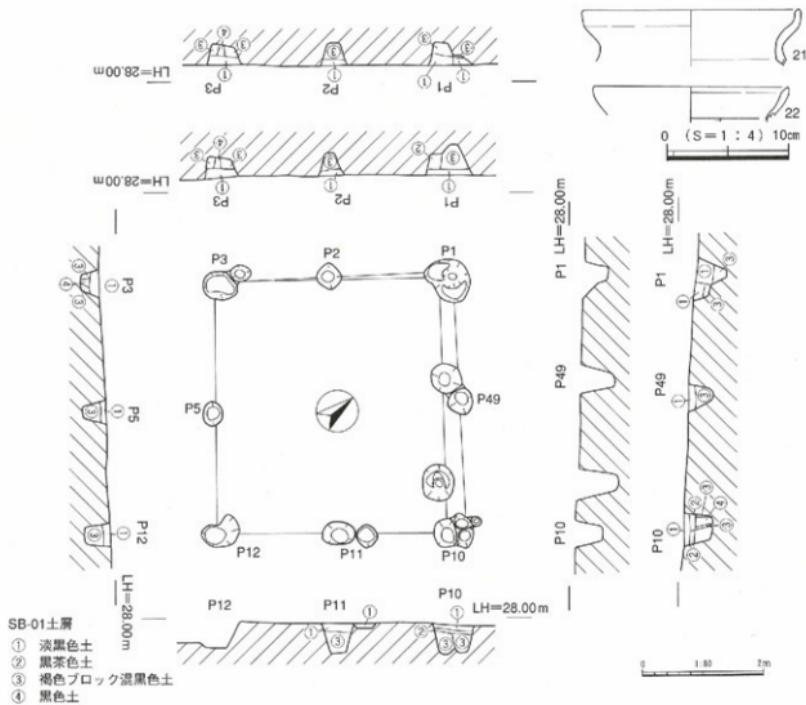
須恵器 No.14は壺蓋、No.15~No.17は壺身、No.18は高壺の脚部、No.19・No.20は甕の口縁部である。

このうちNo.5、No.7、No.12、No.19が床面に近い位置で出土したものである。

これらの遺物から本住居は古墳時代後期前葉のものと考えられる。



第5図 SI-01 平面図・断面図および出土遺物



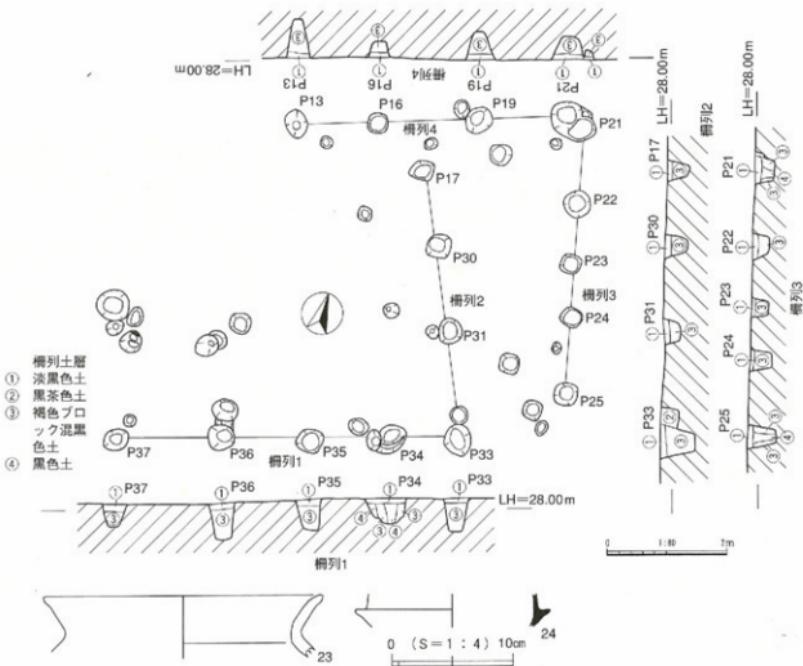
第6図 SB-01 平面図・断面図および出土遺物

掘立柱建物跡（第6図）

S.B-01 SI-01の北側で検出された。桁行2間×梁行2間で主軸はN40°E方向を向く。柱穴は8本で、P1 (74cm×62cm-36cm)、P2 (40cm×36cm-39cm)、P3 (60cm×50cm-32cm)、P5 (42cm×32cm-39cm)、P12 (64cm×37cm-46cm)、P11 (54cm×40cm-48cm)、P10 (35cm²×30cm²-48cm)、P49 (46cm²×42cm-56cm) で、P1P2間1.75m、P2P3間1.9m、P3P5間2.15m、P5P12間2.0m、P12P11間2.0m、P11P10間2.0m、P10P49間2.25m、P49P1間2.0mである。

本建物の北側部分は一箇所の柱穴に二本の柱痕が見られる。これが補助柱なのか、建替えによるもののかは今回の調査で明確にすることはできなかった。P1から土師器の甕片が出土しているが、本遺構が、SI-01をきっていることから、本遺構は古墳時代後期中葉以降のものであると考えられる。

出土遺物 P1からNo.21・No.22の土師器の甕が出土した。



第7図 槵列 平面図・断面図および出土遺物

柵列（第7図）

調査地の南側において柱穴を多数検出した。そのうちいくつか直線状に並ぶものがみられ、それぞれの柱穴の規模はSB-01のものと同程度で、柵列としてはしっかり掘り込んであるように見えるが、それぞれの柱穴に対応するものがないうえ、それぞれの柱穴間隔に若干規則性を欠くことから、ここでは建物跡ではなく柵列として記載することにした。

柵列-01 調査区の南東隅で検出したP-33・P-34・P-35・P-36・P-37の柵列である。P33 (56cm²×44cm-54cm)、P34 (50cm²×46cm-41cm)、P35 (42cm²×38cm-50cm)、P36 (44cm²×40cm-60cm)、P37 (47cm²×38cm-37cm) で、P33P34間1.1m、P34P35間1.3m、P35P36間1.4m、P36P37間1.8mで、主軸はE20° N方向を向く。

柵列-02 柵列-01とは7° 内側にずれるが、ほぼ直交するP-17・P-30・P-31・P-33の柵列である。P17 (38cm²×32cm-37cm)、P30 (39cm²×39cm-37cm)、P31 (42cm²×38cm-26cm)、P33N (32cm²×30cm-28cm) で、P17P30間1.25m、P30P31間1.4m、P31P33N間1.4mで、主軸はN26° W方向を向く。

柵列-03 調査区の東隅で検出したP-21・P-22・P-23・P-24・P-25の柵列である。P21S (48cm²×38cm-31cm)、P22 (47cm²×47cm-28cm)、P23 (34cm²×31cm-28cm)、P24 (34cm²×32cm-36cm)、P25 (38cm²×38cm-46cm) で、P21P22間1.2m、P22P23間1.05m、P23P24間0.85m、P24P25間

1.2mで、主軸はN16° W方向を向く。

柵列-04 柵列-03とは6° 内側にずれるが、ほぼ直交するP-13・P-16・P-19・P-21の柵列である。P13 (50cm×36cm-61cm)、P16 (34cm×33cm-26cm)、P19 (48cm×42cm*-47cm)、P21N (54cm×48cm*-34cm) で、P13P16間1.35m、P16P19間1.6m、P19P21間1.45mで、主軸はE20° N方向を向く。

P19からNo.24の須恵器の坏、P21からNo.23土師器の甕が出土しているが、いずれも埋土からのものである。

土坑（第8図）

SK-01 調査区の西側隅で検出した。地区域外にかかるため半分のみ調査を行った。径約65cm、深さ1.1mの落し穴である。底は平坦で杭穴等の痕跡はないが、断面に杭を立てていたと思われる痕跡が残っている。遺物の出土はなかった。

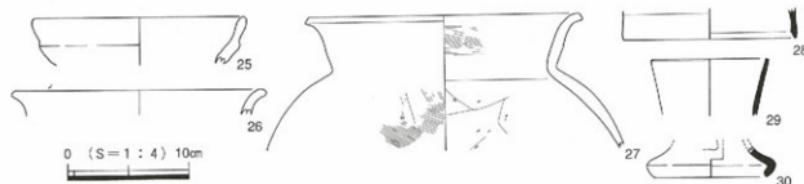


第4節 遺物について（第9図）

遺構外遺物は調査区の北側で集中して出土した。しかし埋土が浅いえ、耕作地だったためか、ほとんどが小片あるいは著しく磨耗したもので出土量に対して図示できたものは少なかった。

土師器 No.25～No.27は甕の口縁部である。

須恵器 No.28は壺蓋の口縁部、No.29は直口壺の口縁部、No.30高坏の脚部である。



第9図 その他の出土遺物

第4章　まとめ

今回の調査で確認された豎穴住居は、他の百塚遺跡群でもみられる古墳時代の典型的な方形住居であった。ここでは主柱穴の他に検出された特殊構造についてまとめてみたい。まず壁際に掘りこまれた土坑状の穴について、その用途については諸説あるが、百塚第1・2・5・7遺跡においてもいくつか確認されているが、用途について記述してあるものは少ない。一般的には貯蔵穴とされていることが多いが、その中で百塚遺跡群ではおそらく穴の角度によるものと思われるが、その用途として補助柱穴としているものがいくつかみられる。今回確認した住居については、周溝を完全に切って土坑が作られていることから水溜めの施設の可能性も考えられる。同類のものとしては百塚第1遺跡の10号住居跡で検出されている。

また南西及び北東の壁面に掘られた小柱穴について、百塚第7遺跡11号豎穴住居跡において上屋を支える柱穴として同様な穴が壁面にあることなどから、今回検出したものも支柱穴の可能性がある。

次に主柱穴から側溝に伸びる溝の中から検出された柱穴については、類例を見出すことが出来なかつたが、この溝が拡張後の側溝に伸びていることから、拡張前の補助柱だった可能性が考えられる。

最後に、今回の調査区は百塚第5遺跡の一角にあたる。百塚第5遺跡は、百塚遺跡の中でも比較的調査された面積が少なく、今回の調査においても空白部分をわずかに埋めるにすぎない。しかしながら今回の調査では、豎穴住居1棟、掘立柱建物跡1棟、柵列4列と遺構の数は僅かではあるが、調査面積からすると遺構の占める割合はかなり高いといえよう。豎穴住居だけ見てみると、現在百塚遺跡群全体で約300棟が確認されており、その内約60棟がこの百塚第5遺跡で確認されている。未調査の部分の広さを考えると、まだかなりの数の住居があると考えるに十分であろう。今後この尾根全体の集落の広がりが解明されることを期待したい。

参考文献

- 『天下畠谷遺跡』鳥取県教育文化財団1994年
- 『百塚第7遺跡（8区）』鳥取県教育文化財団1995年
- 『百塚第5遺跡』鳥取県教育文化財団1995年
- 『小波狭間谷遺跡』鳥取県教育文化財団1995年
- 『泉上経前遺跡』鳥取県教育文化財団1995年
- 『百塚第1遺跡』淀江町教育委員会1989年
- 『百塚古墳群』淀江町教育委員会1992年
- 『百塚遺跡群Ⅲ』淀江町教育委員会1993年
- 『百塚遺跡群Ⅳ』淀江町教育委員会1995年
- 『百塚遺跡群Ⅴ』淀江町教育委員会1996年
- 『百塚遺跡群Ⅵ』淀江町教育委員会1996年
- 『百塚遺跡群Ⅶ』淀江町教育委員会1997年
- 『百塚遺跡群Ⅷ』淀江町教育委員会1999年

遺物観察表(SI-01)

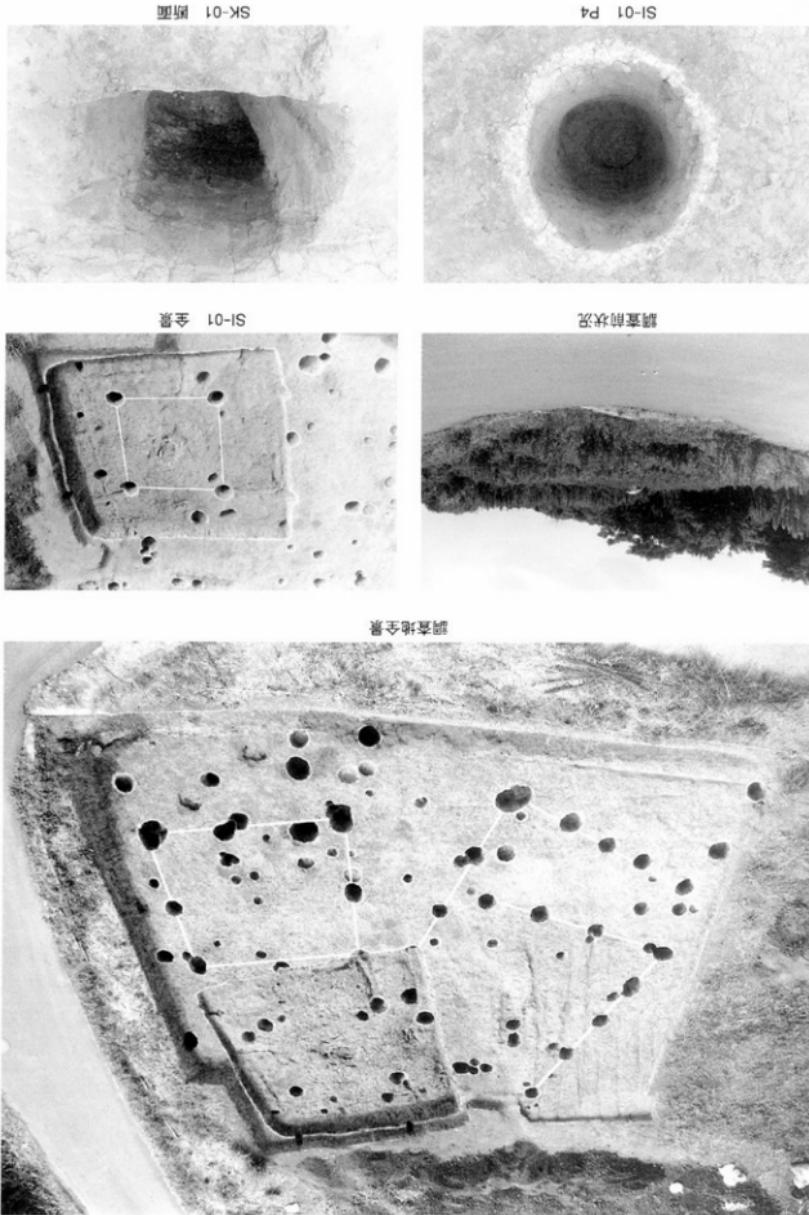
遺物 番号	持団 番号	器種	種別	地区	層位	法量(cm) 口径 残存高 底径			焼成	色調	胎土	調整	備考
						口徑	残存高	底径					
1	5	甕	土師	4区	中層	-	3.2		良好	淡褐色	密	(内)ナデ・ケズリ (外)ナデ	
2	5	甕	土師	2区	上層	19.0	4.5		良好	淡褐色	密	(内)ナデ・ケズリ (外)ナデ	
3	5	甕	土師	1区	上層	20.6	6.9		良	淡黃灰褐色	密	(内)ナデ・ヘラケズリ (外)ナデ	
4	5	甕	土師	3区	中層	17.8	4.0		良好	褐色	密	内外面共にナデ	
5	5	甕	土師	1区	下~中	18.2	3.6		良好	淡黃褐色	密	内外面共にナデ	
6	5	甕	土師	3区	中層	15.2	2.7		良好	淡褐色	密	内外面共に調整不順	外蓋煤付着
7	5	甕	土師	1区	下~中	22.1	3.2		良好	淡黃褐色	密	内外面共にナデ	
8	5	壺	土師	1~3回塗		12.8	4.2		良	淡黃褐色	密 1mm砂粒多く含む	(内)ナデ (外)調整不明	
9	5	高坏	土師	3区	中層	-	1.8		良好	棕褐色	密	内外面共に調整不明	接合部のみ
10	5	低脚坏	土師	1区	上~中	-	4.2	8.3	良好	棕褐色	密	内外面共にナデ	外蓋煤付着
11	5	高坏	土師	2区	上層	-	2.4	11.6	良好	淡黃褐色	密	内外面共にナデ	脚部
12	5	高坏	土師	1区	下~中	-	3.0	10.2	良	赤茶褐色	密	内外面共にナデ	
13	5	上蓋光脚	土師	1区	上層	-	5.2	14.0	良好	褐色	密	(内)調整不明 外)ハケ目後ナデ	外蓋黒斑
14	5	坏	須恵	3区	中層	11.9	2.0		堅繩	青灰色	緻密	内外面共にナデ	
15	5	坏	須恵	3区	上層	-	4.8		堅繩	淡青灰色	緻密	(内)ナデ (外)ナデ・ヘラケズリ	
16	5	坏	須恵	1区	上層	14.6	3.6		堅繩	淡灰色	緻密	(内)ナデ (外)ナデ・ヘラケズリ	かえり部分欠損
17	5	坏	須恵	2区	上層	11.8	5.7		良	灰色	密	(内)ナデ (外)ナデ・ヘラケズリ	
18	5	高坏	須恵	2区	上層	-	3.7	10.6	堅繩	青灰色	緻密	(内)ナデ (外)ナデ	脚部
19	5	甌	須恵	4区	下層	10.0	3.2		堅繩	灰色	緻密	内外面共にナデ	外蓋波状文
20	5	甌	須恵	2区	上層	12.9	1.5		堅繩	淡褐色	緻密	内外面共にナデ	

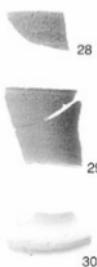
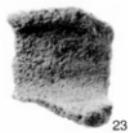
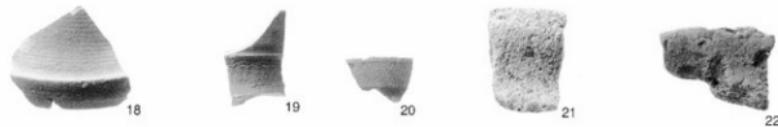
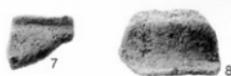
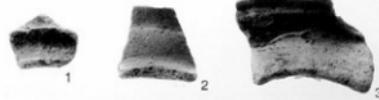
遺物観察表(Pt内)

遺物 番号	持団 番号	器種	種別	地区	層位	法量(cm) 口径 残存高 底径			焼成	色調	胎土	調整	備考
						口径	残存高	底径					
21	6	甕	土師	P1		17.5	4.6		良好	淡黃褐色	密	(内)ナデ (外)ナデ・ヘラケズリ	
22	6	甕	土師	P1		15.8	2.9		良好	(内)緑褐色・外)褐色	密	(内)ナデ (外)ナデ	
23	7	甕	土師	P21		22.4	5.2		良好	褐色	密	(内)調整不明 (外)ナデ	
24	7	坏	須恵	P19		-	2.7		堅繩	灰褐色	緻密	内外面共にナデ	

遺物観察者(その他)

遺物 番号	持団 番号	器種	種別	地区	層位	法量(cm) 口径 残存高 底径			焼成	色調	胎土	調整	備考
						口径	残存高	底径					
25	9	甕	土師	N区		17.0	3.9		良好	淡橙褐色	密	内外面共にナデ	
26	9	甕	土師	N区		20.2	2.1		良好	暗褐色	密	内外面共にナデ	外蓋煤付着
27	9	甕	土師	N区		21.9	11.1		良好	暗褐色	密	(内)ハケ目・ナデ (外)ナデ・ハケ目	外蓋煤付着
28	9	坏	須恵	HII長集		15.6	2.2		良	灰色	密 0.5mm砂粒多く含む	内外面共にナデ	
29	9	直口壺	須恵	N区		9.2	4.7		堅繩	暗灰色	緻密	内外面共にナデ	
30	9	高坏	須恵	N区		-	2.5	9.0	堅繩	灰色	緻密	内外面共にナデ	脚部・透し





報告書抄録

ふりがな	こなみいすみはらいせき						
書名	小波泉原遺跡						
副書名	NTTドコモ米子小波携帯電話基地局設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	53						
編著者名	平木裕子						
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935番地1 TEL・FAX 0859-22-7209 eメールアドレス maibun@sanmedia.or.jp						
発行年月日	西暦2007年3月31日 平成19年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小波泉原遺跡	鳥取県米子市 淀江町小波字 泉原434番373	31202	35度 23分 24秒	133度 20分 46秒	平成17年8月 16日～平成17年8月 31日	164m ²	鉄塔建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
小波泉原遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 据立柱建物跡 柵列 土坑	土師器、須恵器			

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 53

小 波 泉 原 遺 跡

2007年3月

編集・発行 財團法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 福井県米子市長砂町935-1

印 刷 (有)米子プリント社